

# 論文審査の結果の要旨

氏名 松尾 真紀子

本論文は、国際食品安全規格基準の策定機関であるコーデックス委員会において、コンセンサスに基づく合意形成に寄与する要因を、意思決定の考慮事項と議長国による交渉プロセスマネジメントに着目し、具体的な事例の詳細を分析して明らかにしたものである。先行研究は、コーデックスの規格基準が WTO の SPS 協定に参照されて重要性が増したことがコーデックスにおけるコンセンサス形成を難しくしたと論じてきた。これに対し、現実にはほとんどの規格基準がコンセンサスベースで策定され、「政治化」した案件は例外であることを踏まえた上で、コンセンサス形成を可能とする要因を分析した研究は十分になされてこなかった。そこで、本論文では、コンセンサスベースの規格基準の形成が成功・失敗した二つの事例から、意思決定の考慮事項における整理とルール化が一定の「非政治化」（ゼロサムの対立状況から潜在的合意可能領域を模索する状況に転換する）に貢献してきたこと、ルール化しきれなかったコンセンサス形成における限界要因においても議長国のプロセスマネジメントによっては合意形成が可能であること、について明らかにした。

本論文は全 6 章で構成される。第 1 章は、本論文の作業仮説を関連する先行研究を踏まえて説明した。第 2 章は、コーデックスの制度分析から、コーデックスの特性、プロセスマネジメントの鍵を握る部会の議長国の役割について論じた。第 3 章では、コーデックスの意思決定の考慮事項における、「科学」と「科学以外の要素 (OLFs)」の位置づけをめぐるルール化過程を分析し、それが「非政治化」に一定の寄与をした一方、特に「科学以外の要素 (OLFs)」の一部が「非政治化」の限界要因としてとどまったこと、その理由や含意について論じた。第 4 章と 5 章では、「非政治化」の限界要因の「消費者懸念・選好」が関連した二つの事例ーコンセンサスが成功した GM リスク分析のガイドラインの事例と、コンセンサスに失敗したラクトパミンという肥育目的の動物用医薬品の残留基準値の事例を分析した。両事例で、所与条件と、「科学」と「科学以外の要素 (OLFs)」に関する具体的争点を整理し、個別争点で議長国が行ったプロセスマネジメントを、「知識・利害調整の手段」とアクター間の「関係性構築」の両面から分析した。第 6 章では、論文を総括し、研究の意義を論じた。意思決定の考慮事項のルール形成の分析が一定の「非政治化」に寄与したと論じることで、先行研究での議論と現実のギャップの説明に貢献し、また、「非政治化」の限界要因の取扱いがもたらしうる副次的効果やそうした要因への対応オプションを検討した。また、プロセスマネジメントの分析から、交渉の場の制度的構造要因と議長国の役割の関係性を明らかにするとともに、成功事例におけるプロセスマネジメントは、コンセンサス内容の多様性に応じて様々な手段を講じたことによることを明らかにし、「非政治化」の限界要因においてもコンセンサス形成の余地があることを示唆した。

なお、本論文の第 3 章と第 5 章及び第 6 章の一部は、松尾真紀子、湊隆幸（主査）、城山英明（副査）の共著論文として発表されたが、論文提出者が主体となって分析及び検証を行ったもので、論文提出者の寄与が十分であると判断する。

以上、本論文は、コーデックスの実務的交渉過程に関する現場に即した分析を基礎に、交渉合意のメカニズムを明らかにしている点に意義がある。主要な分析対象となっている考慮事項の整理・ルール化、制度的構造要因・議長国によるプロセスマネジメントに加えて、コンセンサスのレベルの多様性（実質的に合意できていないことに関する合意というレベルを含む）を認識した上でコンセンサスに到達する様々な手段（①議題設定のスコーピング、②既存の合意事項の引用、条件付き合意、新たな概念の持ち込み等）を現場の観察から引き出している点に国際協力における合意形成研究としての学術的価値がある。

したがって、博士（国際協力学）の学位を授与できると認める。

以上 1,667 字